

28 掛川市政を蘇らせた榛村純一

著 者 岡本 春一

昭和 52 年(1977)前市長榛葉虎之助の急逝に依って榛村純一新市長が誕生した。一般的には市長は市議会又は市民総代会等の強い要望で重い腰を上げ市政を運営して来た。しかし榛村純一市長の構想は全く異なっていた。掛川市の在るべき姿と自分の発展構想が既に出来上っており、どう展開すべきか骨子が既に出来上っていた。

当選早々彼は「新幹線掛川駅設置構想」を打ち出し運動を開始していた。それも最も実現可能な説得力のある構想で、当時東南海地震に依る緊急対策が叫ばれて対応が取り沙汰されており、新幹線は静岡～浜松の最長区間に避難駅の無い事を国鉄総裁に訴え、即座に実現へと舵を切った。更に申し掛かって来た地元負担金は、市費のみならず大小企業を始め市民の募金 25 億円の集金を成功させて、捻出し実現に結びつけました。

昭和 54 年には全国定住圏モデル構想を立て、全国に先駆けて「生涯学習事始め」運動を展開し、翌年市制 25 周年記念に「生涯学習都市宣言」をして市民の在るべき姿を示し実践に結び付けました。又米国ユージン市と姉妹都市宣言に調印し国際交流の流れを作り、一層の友好関係を作ります。55 年には「年輪の集い」を立ち上げ、各人年齢の節目に当たり人生のあるべき姿に立ち返りらせる機会を作り記念集会を開いた。

翌年には第一回「生涯学習推進市民大会」を開催し、実践進展を図ると共に各地域に「生涯学習地区センター」の創設を決め実践の足固めを造って行きます。之には文部省型(シャワー室設置)と農林省型(農産加工室設置)の 2 方向の補助金があった。東山口は事前に婦人会の児童生徒の低体力体位の向上と、農産活動の向上発展に力を入れて来た関係から農林省型を選び、大型圧力釜、大型洗濯機(蒲団丸洗可)等々補助金で購入出来たので大変役立った。

58 年市内中心部に「生涯学習センター」が 23 億余円で完成し、生涯学習の総本山が出来上り活動の中心としての力量を発揮した。翌年には医療の基締めである「新市立総合病院」が杉谷に完成し、市民の健康安全に万全を期した。並びに千羽に清掃センターが完成し清掃安全の充実を図っている。同年永年課題であった掛川市の歴史を総纏めする「掛川市史」中巻が完成をみます。

61 年には「第 3 セクター天龍浜名湖鉄道」が開通の運びとなり、掛川駅を中心に西部地域発展に寄与します。62 年生涯学習シンポジウムを開催、広く市民の将来に向けて構想を討論しました。63 年には待望の「新幹線掛川駅」が開業する事になり、迅速を競う東京～大阪方面に到る交通の便は一段と活発になり、掛川市発展の基礎固めを作りました。

63 年市民が待ち望んだ「掛川城天守閣復元調査委員会」を発足させ待望の出現を期します。建設費の大半は再び募金で賄う事になります。本格的な原図が掛川に無いので高知城に原図を求めたが無く、高知県立図書館に原図を発見する事が出来ました。市長は早速本式の木造天守閣にこだわりの建設に取掛ります。その為にわざわざ青森檜を取寄せ建築に入ります。平成 4 年上棟式、6 年旧城主山内氏、太田氏を招待して天守閣の竣工式の日を迎えます。

平成 3 年駅南に「美感ホール」を完成させ音楽芸術の拠点にします。5 年市民待望の「東

名掛川インターチェンジ」の共用が開始され、東西交通の利便性が一層容易となって市民の利用は日を追って高まった。7年には市民参加の成人学習講座「とは何か学舎」が開講し、各分野の研修講座が開催され活性化が計られます。同時期に掛川市主催で「塩の道」会議が開催され、古代人間の生命線である塩が何れの道を通して塩尻に届いたかの議論がなされました。8年には「掛川市役所新庁舎」がモダンな建築様式に依って長谷に完成し、統合された素晴らしい庁舎となった。以下略、等々数えれば限り無い足跡を残した。

今掛川市役所前に榛村純一市長の銅像が立っている。誠に相応しい人物の銅像である。前述の通り自己の理想とする都市計画に基づいて、住民の利便性と安定並びに定住性を最優先とする都市構想は、全国屈指の先進的の大事業と云えるだろう。

私も諸事業に参画させて頂いた。特に第2エコポリス事業では事業に相応しいスタッフを揃えて頂き、順調に事業が進展した。

しかし「掛川市史編纂事業」では当時は社会教育課は(本庁内で無く生涯学習センター北の医療センター内にあり、市史編纂室は更に旧掛川市立図書館3階)に在った為か、一度も顔を出さない課長もあり、担当者は単に編纂室の電話番号と感違いしてか、時間外勤務を認めず自己の職責のみ果し去った課長もいた。磐田市は市史編纂室に7人体制、袋井市は4人体制と充実していたが、掛川市編纂室は2人で遺跡発掘が盛んになると1人は引き揚げてしまい、実質1人体制で全てを賄い悪戦苦闘を強いられた。

編纂事業は編纂委員会で決められた期日までに、原稿を送って来る約束で有ったが、送って来る執筆者は唯一人のみ、残りは締切以降2~3回催促で届くのが常套であり、中には原稿が遅れ静岡駅まで度々時間を打ち合せ受取りに行く事もしばしばあった。受取った原稿も時間を掛けて精査しなくてはならず、辞書と首っ引きで一言一句間違いの無い発刊には神経を使った。

在任中自己の職責のみで編纂室に姿を見せず去って行った課長と、何時も笑顔でワザワザ図書館に来た時は3階の編纂室に登って来て、市史の編纂状況を確認指示を戴いた市長とでは雲泥の差が有った。更に市長退職後も掛川報徳社に在って亡くなる半月程前、岡田佐平治が最初に日光の二宮尊徳に教えを請う為に、遠州の七人衆を連れて行った影森村の内田啓助を調べる為に、内田氏邸を調べたいと手土産を持って訪ねて来たが、今思うとわざわざお別れに来た様な気がする。